

## 第3期ロジスティクス環境会議 第2回包装の適正化推進委員会 議事録

I. 日 時：2008年11月6日（木） 15：00～17：00

II. 場 所：東京・港区 社団法人日本ロジスティクスシステム協会 大会議室

III. 出席者：22名

IV. 内 容：

- 1) 包装に係る環境パフォーマンス算定に関する調査結果について
- 2) 今後の活動について

V. 開 会

事務局より開会が宣された後、増井委員長の司会のもと、以下のとおり議事が進められた。

VI. 報 告

1) これまでの経過と本日の検討事項について

事務局より、資料1に基づき、これまでの経過と本日の検討事項について説明がなされた。

VIII. 議 事

1) 包装に係る環境パフォーマンス算定に関する調査結果について

事務局より、資料2-1、2-2、2-3、2-4に基づき、調査結果、及びそれらの考察について説明がなされ、以下のような意見交換がなされた。

### 【主な意見】

(当委員会の活動内容について)

委 員：委員会名称は「包装の適正化」でありながら、ISO14000sの会議を行っているような印象を受ける。適正化という以上、どのように包装改善を行っていくかといったことを議論すべきではないかと個人的に考える。

委員長：この場は「ロジスティクス環境会議」の中の委員会であり、環境負荷低減のために包装部分としてどのようなことを行っていくかということが検討の主眼となる。

事務局：前回の委員会で、活動内容を検討した結果、「包装に係る環境パフォーマンス」について検討を行うこととした。

(調査結果全体を通して)

委員長：回答が10社にとどまったことも勘案すると、「環境パフォーマンス算定の基礎となるデータは捉えている企業は少ない」と考えるべきだと思う。

副委員長：回答企業10社のうち、荷主が5社であったが、荷主の方がデータをより捉えている傾向があるかどうか教えていただきたい。

事務局：資料2-1の図表3-1のとおり、包装材を製品と一体で捉えているケースが多く、逆に言うと包装材単独で捉えている企業はそれほど多くないという結果であった。

委員長：調査結果にあるとおり、工場出荷ベースではデータを捉えることができるが、それ以降になると困難だと考える。現在、カーボンフットプリントの議論の中で、ライフサイクル全体におけるCO<sub>2</sub>排出量を表示しようとしているが、今回の結果から見ても不可能であることを改めて認識した。

(排出量の金額ベースでの把握について)

委員長：“廃棄”や“売却”に関しては、金額ベースについての設問を設けていなかったが、当然そ

これらの値は把握できているという理解でよいか教えていただきたい。

事務局：事務局としても、そのように理解しており、今回、あえて設問を設けなかった。

副委員長：当社では、産業廃棄物にかかわる処理の費用を捉えているが、本社としては勘定科目1つの中の合計の数値でしか捉えておらず、1回あたりの重量等とそれにかかわる費用といった細かいことまでは分かるようにはなっていない。もちろん、各現場ではそれらの数量等も捉えているので、本社においてもそれらの数値を把握できるように検討しているところである。

(見積書への環境情報の記載について)

委員長：資料2-1の図表18にあるように、見積書に環境情報を記載するといったことは、たいへん有意義だと考える。

委員：他社との差別化をはかるべく実施したが、実際のところ、売上増には寄与していない。見積書を受け取る方が、どの程度環境問題に関心を持っているかに左右される。

委員長：今はまだ結果として現れていないかもしれないが、今後、CO<sub>2</sub>何gと記載されていると、それらを比較し、少ない方を選んで購入する時代が来ると思う。そのためには、現在検討している算定のルール化を行わないと、様々な問題が出てくることが想定される。

(重量データについて)

委員：資料2-2を見る限り、CO<sub>2</sub>排出量を算出する前段である「重量」を捉えることが困難であるという印象を受けた。逆に言うと、重量が捉えられていない中で、当委員会の活動内容である「包装の適性化」を推進することは困難ではないかと思った。

委員：包装材を販売する側が重量を捉えていないケースも多い。ただし、荷主等が包装材を購入する際に、重量データの提供を要請するようになれば、納品書等に重量を明記する企業も増えてくると考える。

委員長：包装設計をする際に“包装の重量”をどの程度考慮しているか教えていただきたい。

委員：“包装の重量=コスト”という意識のため、重量を少しでも減らすべく設計を行っている。

委員：「数値をあまり捉えていない」という結果であるが、「この委員会でルールを定め、その結果の普及を図っていく」というスタンスでよいと考える。

委員：段ボールから通い箱に変えることで、輸送重量が増える。その結果、輸送時のCO<sub>2</sub>排出量にも影響を与えることから、これらの評価をどのように行うべきかといった課題もある。

(荷主、物流事業者双方での捉え方)

委員：包装材における環境パフォーマンスの基礎となるデータとしては、使用量と廃棄量の2つが主となるが、メーカーである当社においては、廃棄量については特に捉えていない。一方の使用量については、使用量を購入量と捉えて、それらを減らすために、スリム化とリターナブル化を推進している。したがって、まずは使用量に絞ってルール化の検討を行ってはどうかと考えている。

委員長：貴社で使用されたリターナブル包装材の廃棄はどのように行っているか教えていただきたい。

委員：リターナブルで使用している素材は、主として鉄であることから、それらは有価で引き取ってもらっている。

委員：輸送事業者の立場としては、自社で購入し、梱包する部分しか数値を捉えようがない。また、着荷主等の顧客の要求で包装の仕様が決まる部分もあり、自社の意向だけで削減できない部分もある。

委員長：工場出荷部分での評価は出来ても、その後の評価をどのように行うかが難しい。例えば、単純に焼却する、リユースを何回するといったモデルを複数設定しながら、検討を行うことが必要ではないか。

委員：リターナブルについては、回収時のトラック輸送、洗浄等でのCO<sub>2</sub>も発生しており、それをどのように捉えるかといったことも課題になるのではないか。

委員長：指摘されたような内容を資料2-4の図の中に加えていく必要があると考える。

委員長：資料2-4の図では、単に「廃棄・売却」となっているが、リユース、リサイクルといったことをどのように評価するのか、あるいは荷主の場合はそこまで評価しないのかといったルールの検討が必要になる。

副委員長：物流事業者の立場としては、自社で購入（IN）した包装材と比べて、排出（OUT）している量の方が圧倒的に多いことから、「OUTの中のものをできるだけ分別してリサイクルにまわす」といった取り組みを進めている。単にINとOUTの比較ではなく、このような視点での検討も必要だと考える。

委員長：ご指摘いただいた取組みはたいへん重要であり、これらの努力が反映されるような算定方法を検討する必要があると考える。

事務局：本委員会のメンバーとして、製造業、あるいは製造業を親会社にもつ物流子会社が多いことから、製造業でモデルを作り、それを物流事業者等でも活用できるかどうか、また活用できない部分があれば、そこを修正する形で検討を進めてはどうかと考える。

委員長：それぞれの立場で捉え方が異なることから、それぞれモデルを構築する必要があると考える。

(その他)

委員長：資料2-3のP2の下段で、「リターナブルについては物量に比例して総量が決まる」とあるが、回収頻度や方法、さらには再生方法等によって総量が左右されると考える。

委員長：素材別の重量を捉えて、それらに原単位を乗じてCO<sub>2</sub>を算出することとなるが、①原単位として用いるLCAデータそのものにあいまいな部分がある、②10年ぐらい前の古いデータを用いている、といったように課題も多い。

#### 【決定事項】

- ・本日の検討を踏まえ、事務局で素案を作成することとする。

## 2) 今後の活動内容について

事務局より資料3に基づき、今後の検討内容について説明がなされた。

#### 【主な意見】

委員長：ヒアリングを行う考えがあるか教えていただきたい。

事務局：事務局で素案を策定し、次回委員会で提案する予定である。ただし、素案策定の中で必要に応じてヒアリング等を実施する場合もあるかと思うので、その際にご協力いただきたい。

#### 【決定事項】

- ・今後は資料3をベースに検討を進めていくこととする。

## 3) 今後のスケジュールについて

事務局より、資料4に基づき今後のスケジュールについて説明がなされ、次回委員会を下記のとおり開催することとなった。なお、詳細については、事務局よりメールにて連絡することとなった。

<第3回包装の適性化推進委員会>

日時：2009年1月15日（木）15時-17時

会場：中央大学駿河台記念館 5F 570会議室

## IX. 閉会

以上をもって全ての議事を終了し、増井委員長は閉会を宣した。

以上